

<b>Title</b>	『アメリカ黒人の歴史：奴隷貿易からオバマ大統領まで』（上杉 忍著、中央公論新社、2013 年、iv+236 頁）
<b>Author(s)</b>	森田，美千代
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3：55-56
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4968">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4968</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# 『アメリカ黒人の歴史 —奴隷貿易からオバマ大統領まで—』 (上杉 忍著、中央公論新社、2013年、iv +236頁)

森田 美千代

本書の著者は、上杉忍氏である。上杉氏は、静岡大学教授、横浜市立大学教授などを経て、現在(2013年度現在)北海学園大学教授である。専門は、アメリカ史である。上杉氏の著書には、本書のほかに、『バクス・アメリカーナの光と影』(『新書アメリカ合衆国史3』)(講談社現代新書、1989年)、『アメリカ南部黒人地帯への旅—黒人運動の源流をたずねて—』(新日本出版社、1993年)、『公民権運動への道—アメリカ南部農村における黒人のたたかい—』(岩波書店、1998年)、『二次大戦下の「アメリカ民主主義」—総力戦の中の自由—』(講談社選書メチエ、2000年)などがある。

本書は、「『アフリカ系アメリカ人』『アメリカ黒人』の経験を軸に据えつつ、この国[アメリカ]がまだ英領植民地だったころからの『一つのアメリカ史』を描こうとする試みである」(15頁)と、著者が述べているように、「アメリカ黒人」を軸にした「アメリカ通史」である。通史といえは、ほとんどの場合、共著であるが、本書は、上杉氏という一人の研究者によって、著されている。一人で通史を書くことは、並大抵のことではない。著者のその力量に敬意を表したい。一人の研究者によって通史が書かれたこと、これが、本書の第一の特徴である。

本書は、「本田創造著『アメリカ黒人の歴史』(岩波新書、1964年)と『アメリカ黒人の歴史 新版』(同、1991年)の内容を、その後の時代状況の変化を踏まえ、また、この間のアメリカ史研究の蓄積に基づいて、書き直すことを目指したものである」(213頁)と、著者が記すように、本書は、故本田氏の学問的仕事を意識し、本田氏を学的に乗り越えようとして書かれたものである。上杉氏も本田氏も、著書のメイン・タイトルは、同じ『アメリカ黒人の歴史』である。この一事をみても、上杉

氏が本田氏をいかに意識して本書を上梓したかがわかる。本書は本田氏の学的仕事とその乗り越えを自覚して書かれたこと、これが、本書の第二の特徴であるといえよう。その試みは、ある程度成功しているといえるのではないか。その理由は、次に述べる本書の第三の特徴とかかわっている。

本書の第三の特徴は、第二の特徴とも関連しているのであるが、本書は、「まだ『歴史』としては描かれてこなかった1964年公民権法制定以後の50年にできるだけ多くの頁数を割いている」(216頁)ことである。本書は、本田氏よりも、もっとながいタイム・スパンで、「アメリカ黒人の歴史」を取り扱っている。

本書の第四の特徴は、「アメリカ黒人」を、アメリカの「カナリア」として捉えていることである。「炭鉱に入る際に有毒ガスを検知するため労働者が連れていくカナリアのように」(14頁)、「アメリカ社会の危機を最も敏感に感じ取り、その危機をアメリカ社会に知らせ、同時にアメリカ社会の変革の最前線に常に立ってきた集団である」と、著者は「アメリカ黒人」を捉えている。それは、「南北戦争・再建期や公民権革命の時に典型的に表れている」(14頁)、と著者は言う。

本書の構成は、6章に、プロローグが付いている。第1章 黒人奴隷制共和国アメリカ(1502-1860年)、第2章 南北戦争から「どん底」の時代へ(1861-1929年)、第3章 大恐慌・第二次大戦期の黒人(1930-1945年)、第4章 冷戦下の公民権運動(1946-1965年)、第5章 脱人種「白人保守革命」の時代(1966-1992年)、第6章 「分極化」と「多様化」の時代(1993年以降)、である。

以上のように、本書は6章の構成となっているが、著者は、「アメリカ黒人」の闘いの歴史のうねりを「公民権運動の展開」にみていることがわかる。

したがって、本書の構成は、次のようなまとまりになっているといえよう。

最初のまとまりは、第1章から第4章まで(1502-1965年まで)である。著者は、次のように述べている。「英領植民地から奴隷制共和国として独立したアメリカが、黒人を法的にも社会的にも差別、抑圧し、彼らに社会全体の秩序を維持し安定させる船の底荷のような役割を押し付けてきたこと、しかし黒人たちは抵抗をやめず、アメリカ社会全体に警告を発し続けてきたこと、アメリカ社会はそれを無視することはできなかったこと[それは、1964年の公民権法の成立によって可視化された]について触れている」(9-10頁)。

次のまとまりは、第5章(1966-1992年)である。著者は、この時代を、脱人種「白人保守革命」の時代と、捉えている。なぜならば、著者によれば、「人種という言葉を用いずに白人多数派を結集した、新自由主義的保守革命が達成されたからである」(11頁)。

最後のまとまりとして著者が捉えているのは、第6章(1993年以降)である。著者は、この時代を、「分極化」と「多様化」の時代と、名付けている。「分極化」と、著者が表現しているのは、「黒人中産階級がかつてなく増大し、アメリカ社会に統合されている一方で、アメリカ社会の最底辺に沈殿している大部分の黒人の状況が、アメリカ主流社会から隔離され一層悲惨なものになっていること」(12頁)である。「分極化」が意味する内容とそのネーミングは、説得的である。では、「多様化」は、どうだろうか。著者の説明によれば、1993年以降にアメリカに入ってきた「アフリカ系アメリカ人」は、彼らの祖先のように強制連行されてきたのではなく、「この国[アメリカ]に機会を求めて自らの意思でやってきた『移民』であり」(211頁)、しかも、「2000年、アメリカ黒人人口の三分の一が移民である」(209頁)。加えて、これらの移民は、「従来のアメリカ国内の黒人団体には加わらず、独自に、例えば、ジャマイカ系、ハイチ系、ナイジェリア系、セネ

ガル系、ヨルバ系、エーヴェイ系など出身集団別にそれぞれの団体を結成して活動している」(210頁)という。書評者には、「多様化」というネーミングはいいとしても、それが意味する内容は、説明不足であり、著者が最も恐れていた「事実の羅列に終わってしまい、歴史になっていない」(216頁)のではないかと、思える。しかも、この「多様化」の部分は、本田氏の『アメリカ黒人の歴史』では触れられていない部分なので、もしも上杉氏がこの「多様化」の部分にもっと頁数を割き、もう少し丁寧に論述していれば、上杉氏は、「本田氏の著作ばかりが、『アメリカ黒人の歴史』の決定版ではない」(214頁)と、主張することができたであろう。



『アメリカ黒人の歴史—奴隷貿易からオバマ大統領まで—』

上杉 忍 著

定価820円(税別)

発行：中央公論新社

ISBN978-4-12-102209-7

(もりた・みちよ 聖学院大学総合研究所教授)